みのEDO
MINO
東京⇌笠原情報誌　MAIL版

発行：多治見市美濃焼タイル振興協議会
TEL 0572-43-2141
発信：多治見市・笠原町東京情報局
tilesea.ms@gmail.com
＊協議会のウェブサイトでも公開しています。

NO 217
2020.2.26

多治見市モザイクタイルミュージアム

企画展「世界のモザイク・今」開催中

Mosaic in the World Now

多治見市モザイクタイルミュージアム（岐阜県多治見市）では、ヨーロッパや日本の作家によるモザイクアートを紹介する企画展を開催中（～5月10日まで）。会期の初日にはポーランドの作家、マチルダ・トラセウスカさんのワークショップが行なわれた。

企画展のタイトル文字の背景は、「モザイク展2019」の大賞作品「長い不在」（妙川幸子）。

喜井豊治さん（左）とマチルダ・トラセウスカさん（右）。喜井さんはワークショップのサポート役を務めた。

「ただ今、増殖中」（喜井豊治）
植物成長の勢いを装飾的パターンで表現。

「豊饒の宴」（櫻井真智子）

「今日だったっけ」
（平井能子／日本出身／イタリア在住）

「Motherhood（母性）」
（レイチェル・ブレナー／オーストラリア）

今回の企画展は、モザイク作家の団体「モザイク会議」の協力のもとに開催。タイトルの「モザイク」とは、モザイクタイルのことではなく、大理石やガラス、やきもの等、様々な素材によって作られたモザイクアートのことを指す。会場には、同団体が主催する「モザイク展2019」の受賞作品（みのEDO214号で紹介）、および海外作家の作品など、19点を展示。日本で目にすることの少ない、世界の最先端のモザイクアートが集合する貴重な機会となった。

無数の小さなかけらを用いて緻密に作られた作品は迫力があり、見るほどにその世界観に引き込まれてしまう。そんな心地よい緊張感さえある企画展の空間とうって変わり、コレクション展示「昭和の多治見のモザイクタイルアート」の作品は、可愛らしさ、親しみやすさが魅力。これらモザイクタイルを使用したデザインパターンや絵画的作品は、昭和時代中期の笠原町（現在の多治見市笠原町）で生み出されたもの。タイルで飾られたお皿が当時、海外に輸出されていたと知ると、たくましさをも感じる。

小さなかけらが集合し、多様な表現を生み出す「モザイク」。その奥深さを伝える展示となった。

昭和の多治見のモザイクタイルアート

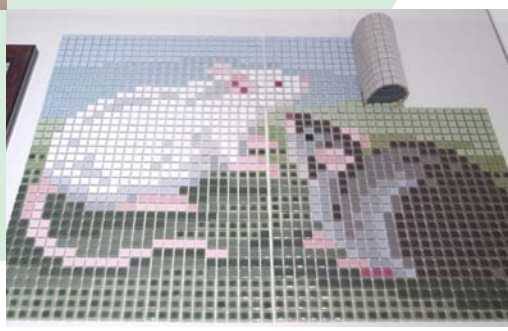
モザイクタイルの色や形の多様さが生み出す様々なパターンや絵画的表現

＊は、モザイクタイルミュージアム所蔵

モザイク干支額絵

三分五厘の施釉磁器モザイクタイルを使った干支の額絵は、タイルの商社が建材店や工務店などに向けたお歳暮や、お年賀の定番だった。

モザイク干支額絵 寅年
アート制作：加藤敏子氏／昭和36年頃*



モザイク干支額絵 子年
アート制作：横井浩之／2020年（2008年のデザインによる）／個人蔵

三分五厘角
複数社／昭和30年頃（1955）*

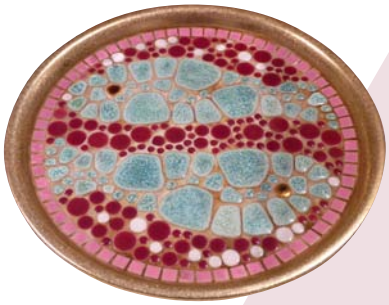
三分五厘アート

タイルの名称には尺貫法の名残がある。「三分五厘」は1辺が約1cmの正方形のモザイクタイル。方眼紙を埋めるようにデザインしやすいためか、様々なパターンが残されている。

三分五厘角窯変
不明／昭和30～35年頃（1955～60）*

タイル貼付角形灰皿
笠原・山正水野商店／昭和35年頃（1960）*

タイル貼付宝石箱
笠原・深川製陶商事／昭和35年頃（1960）*



タイル貼付大皿
技研陶器製作／昭和30年代（1955～65）*

タイル貼付宝石箱
笠原・三K中島タイル／昭和35年頃（1960）*

タイル貼付小皿
笠原・深川製陶商事／昭和35年頃（1960）*

右：**タイル貼付脚付果物皿**
笠原・深川製陶商事／昭和35年頃（1960）*

左：**タイル貼付脚付果物皿**
笠原・三K中島タイル／昭和37年頃（1962）*

タイル貼付けの皿、小物

灰皿やコースター、器などにモザイクタイルを貼付けた作品は、昭和30年代半ばから作られていた。海外に輸出され、とくに香港やイギリスなどからたくさん注文が入ったという。

関連企画 マチルダさんのワークショップ

本格モザイクアート体験

1月25日、26日の2日間、モザイク作家のマチルダ・トラセウスカさんに、モザイクアートについて教わりながら作品制作に取り組むワークショップが開催された。2日目（26日）の様子をレポートする。

マチルダ・トラセウスカさん
1978年、ポーランドのワルシャワに生まれる。ワルシャワ美術アカデミー絵画学科卒業後、ラヴェンナ芸術アカデミーモザイク学科に学ぶ。

マチルダさんの作品

企画展に展示されている作品「水族館」。水槽の中の魚を、動物（犬）が見つめる様子を描く。魚をモザイクで描くことで、水槽の外側と内側の世界を3次元的に表現している。

ワークショップで制作するのは、絵画とモザイクを組み合わせた作品。参加者はフレスコ画か、アクリル画のどちらかを選択（1日コースはアクリル画のみ）。

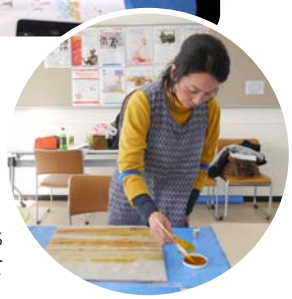
＊フレスコ画
漆喰を塗り、それが乾かないうちに顔料で絵を描く技法。

モザイクに使うタイルはたくさんの種類を用意。

絵を描くのが大好きという小学生の女の子は1日コースに参加。隣でお母さんがタイルを割る作業をサポート。マチルダさんは、どの部分をモザイクにするかをアドバイス。

和気あいあい、でも真剣！

2日コースの参加者は全員がフレスコ画を選択。1日目はベニヤ板にセメントを塗り、タイルを配置するまでを作業。2日目は、さらにその上に漆喰を塗る作業から開始。



漆喰が乾かないうちに顔料で色をつけていく。

どれも力作！

参加者の完成作品！

午前中から作業開始、15時までの予定時間を少しオーバーし、ようやく完成。（サイズは40×40センチ）

今後の関連企画 3月20日（金・祝日）「碧亜希子の毒キノコ・モザイク」要予約。詳細はミュージアムのウェブサイトにて。

タイル×京都

後編

タイルで町家をリノベーション
～町家の再生・販売を手がける「八清」

京都では、町家を再生し店舗などに活用する例をよく見かける。京都の不動産会社「八清（はちせ）」のウェブサイトで壁全面にタイルが張られた町家を発見。この「タイル町家」の設計担当者である建築士・木村隆一さんを訪ね、タイルを使う理由について伺った。

前庭と外観

かくれ家
～ロジオクノツシニカイ～

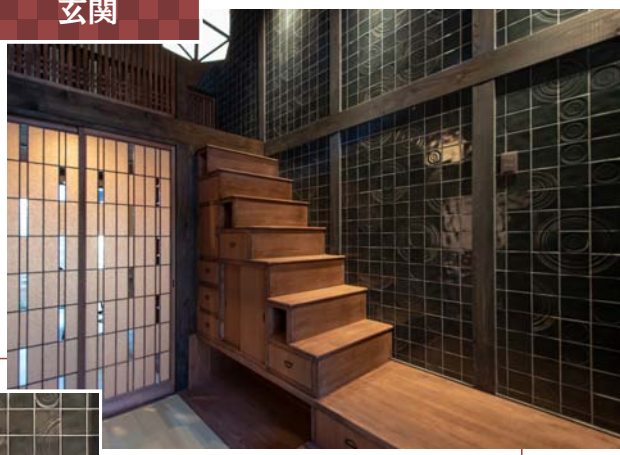
路地を進んだ先に現れる、厨子二階（ツシニカイ）の京町家。厨子二階とは、通りに面した二階部分の軒が低い構えをいう。玄関に入ると、水紋の模様が刻まれたタイル壁とグレーの床に、吹き抜け勾配天井のシックな空間が広がる。

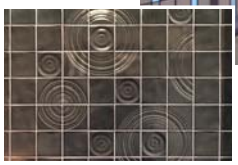
リビング

「タイルの色が強すぎなくていいですよね。色むらや濃淡があって、同じ色に見えないのでやわらかい印象になると思います」（木村さん）

吹き抜けの二階までタイルの壁が続く。

玄関





模様があるタイルと無地のタイルをランダムに配置。シート張りにできず職人さんが一枚ずつ張った。

大きな面でタイルを見せる

八清は、京町家の再生・販売を手がける不動産会社。同社のウェブサイトでは、伝統を活かしつつ、現代風のセンスで再生された町家が多数紹介されている。その中の一つ「かくれ家～ロジオクノツシニカイ～」と名のついた町家は、二階まで吹き抜けの壁全面に、ブルーグレーのタイルが張られている。エキゾチックな雰囲気で、重厚感のある洋風家具もしっくりとなじむ。

「ずっと前から、タイルを大きな面で見せる空間をつくってみたかったんです」と、再生を担当した建築士の木村隆一さん。この町家は二階まで吹き抜けであることに加え、壁も隣の部屋とひとつづき。町家にはあまりない、広々とした空間がこの「タイル町家」を実現させた。

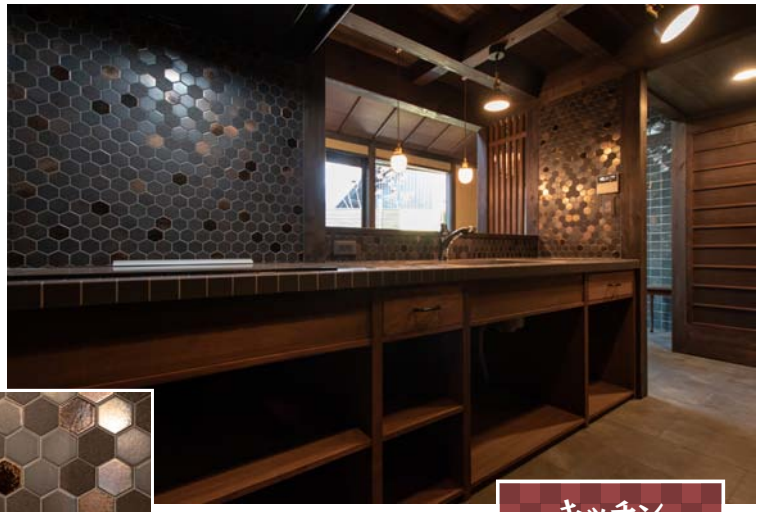
「一般的に『タイルは高い』というイメージがありますし、これだけバーンと張ってあるとインパクトがあると思います。写真より実物のほうがきれいに見えますよ」と胸を張る。「お客さんの反応も悪くない」そうで、すでに売却済みだそうだ。

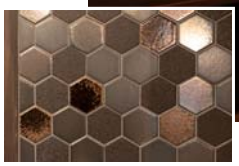
住宅でここまでタイルを使っている例はあまり見ない。その理由の一つとして、木村さんは八清の「町家を買取り、再生して売る」という業務形態を挙げる。建築士がタイルを提案しても、施主が「高くつく」と判断すれば使えない。施主がいないゆえ、予算にある程度自由が利く。

「面白い空間にするために、多少施工費が上がってもタイルを使う、という選択ができます」。

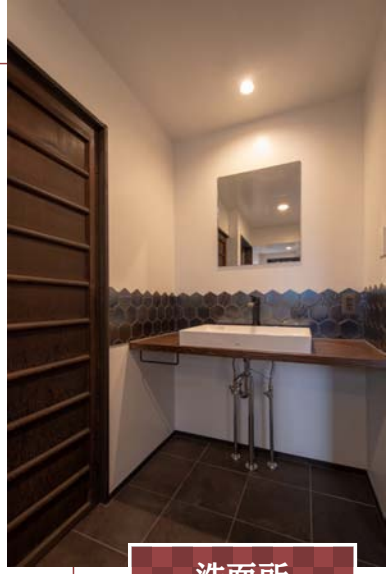
また、町家では左官壁が基本だが、ほかの素材を使って変化をつけたい場合、ビニールクロスは安価だが伝統的な空間にはそぐわない。一方、壁紙としても使われる京唐紙は高価。タイルを選ぶ理由には、金額面も選択の余地があり、様々な種類があり個性を出せるということがあるようだ。

かくれ家～ロジオクノツシニカイ～

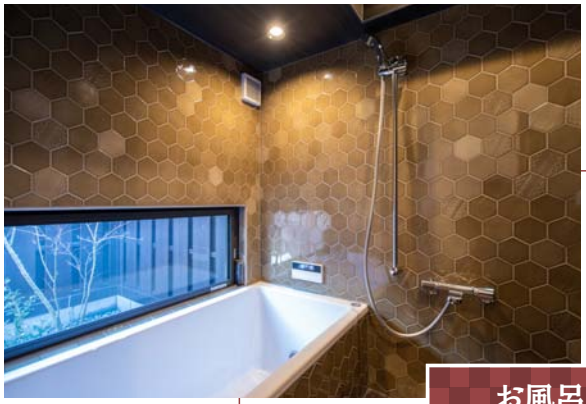




キッチン



洗面所



お風呂

町家に合うタイルは？

よく使うのは六角形や、凹凸があるといった変形のタイル。色は黒や深い色が多い。「町家の木部は黒っぽい色で、壁は漆喰なら白、聚楽なら黄土色や土色。カラフルなタイルも合うと思うんですが、黒っぽい色のほうが合わせやすいですね」。ちなみに金額的に使いやすいのは平米単価が１万円前後のものだという。「いいなと思っても予算に合わず、使えないタイルもあります」。

あったらいいなと思うタイルは？

「一番ほしいのは温度で色が変わるタイル。海外にはあるようです。遊びの部屋の壁、階段の段板、お風呂などに張ったら面白いと思うんですよね」と、思いもよらない回答。「全面でなくても壁に何枚か色が変わるタイルを配置しても」。実現したら楽しそうだ。

木村隆一さん（右）と、広報担当の安藤雅人さん（左）。「タイル工場の見学をして、できること、できないことを知ったうえで、新しいタイルを提案してみたいです」（木村さん）

タイル業界への要望

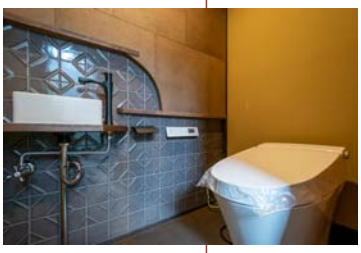
タイルは主にインターネットで探すという。「京都にはタイル専門のショールームがなく、大阪まで行くのも大変。ネットで見てよさそうなタイルがあったら手当たりしだいサンプルを送ってもらいます」。

ただ、業種が不動産だからか、タイル屋さんを通してください、と言われることも。また、プリント系タイルは実際に張ってある様子を見ないと判断ができないが、多くの場所で使われているタイルは使う気が失せてしまう。こうした状況は、改善の余地がありそうだ。（ちなみに前号で掲載したタイルギャラリー京都はご存知なかったので紹介）

じつは開口一番、「最近面白いタイルがあまり見つからなくて」と吐露した木村さん。タイル業界に望むのは、様々な個性あふれるタイルを作ってほしいということ。「最近は個々のタイルメーカーさんもお洒落なカタログを作るようになって面白いのですが、それぞれがもっと特色のある多彩なタイルを作るといいなと思っています。何かまだ無難なものが多い気がします」と少々厳しいコメント。

また、タイルの使用量を増やすには、人と違うものを求めがちな建築士にPRするよりもまず、一般の人にタイルを使いたいと思ってもらうほうがいい、と考える。

その方法としてたとえば—と挙がったのは、モザイクタイルミュージアムのサイトで自分の好みのタイルを探せるシステム。さらに「いまオリジナルのノートを作れる



東福寺北の京町家

場所ごとに材質の違うタイルを採用。キッチンには、タイルが敷きつめられたカウンター、その下には作りつけの収納を設置。心地よい冷たさを持つタイルと、温かみのある木製の収納が調和する。水回りには水はけの良い凹凸のものを選び、機能性をも追求。

大正の面影薫る京町家

大正時代に建てられ、理髪店として使用されていた京町家。日本の伝統色である深緑のタイルを、キッチン・洗面脱衣室・二階和室の壁面に張り、造作キッチン、レトロな照明器具や洗面水栓、ステンドグラスなどを設え、大正時代の華やかな雰囲気を再現。

ウェブサイトがありますが、そんなふうに気軽にオリジナルのタイルを作れるといいなと思います」と続けた。「ノートのように」とはいかないかもしれないが、DIYでタイルを張る人も増えている今、共感するユーザーも多いのではないだろうか。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

取材の最後、最近取り寄せたという、近々発売予定のサンプルを見せていただいた。「このタイル、少し鉄っぽく見えますよね。キッチンや洗面所で光を当てたら、反射してきれいに見えると思います。町家だけでなく新築住宅でも映えそうです」と、すでに使うイメージがわいているようだ。「八清の物件を見て、こういうふうにタイルを使いたいと思ってもらえたら嬉しいですね」。

新たな「タイル町家」が生まれることで、タイルファンも増えていくに違いない。

八清が所在するのは、地下鉄烏丸線四条駅の近く、個人商店が並ぶ東洞院通に佇む築50年ほどのビル。町家に関する様々な活動も行なっており、3月8日（March・マーチ／8・ヤ）の「町家の日」、および町家week（3月1日〜8日）にちなみ、イベントを開催するほか、京町家検定を実施。詳細は下記サイトにて。
https://www.hachise.jp/event/havefunmachiya2020/index.html

敷地内の壁に張られたレトロなタイルにも注目。